

コロナ禍における 高校での試み

大庭 大輝

新型コロナウイルスの感染拡大を背景とした全国一斉休校の中で、勤務校の筑波大学附属高等学校では、生徒各自の通信環境調査や急遽予算を確保しての機器貸与などを経て、2020年4月半ばには何とかオンラインによる授業の環境を整備することができた^①。このような状況下で始まった今年度の授業の試行錯誤について、おもに3年生の選択科目日本史B(4単位)を例に紹介したい。なお、本校では地歴科として1年次に地理Aと世界史A(いずれも2単位、必修)、2年次に日本史A(2単位、必修)、3年次に選択科目を置いている。

なお、休校以前の授業では、資料の読解、その解釈にもとづいた議論、ミニレポート作成を柱とし、ほぼ毎時間グループワークを取り入れてきた。また、部分的にはあるが、Google社の教育支援サービスであるG Suite for Educationを利用していた。一斉休校以後の授業では、これらのシステムを最大限活用しつつ「可能な限り以前に近い授業」の実現を基本方針とした。

①学校としての対応については、筑波大学附属高等学校ウェブサイト「休校期間中の本校の取り組み」(<http://www.high-s.tsukuba.ac.jp/shs/wp/closure/>〈最終閲覧日:2021年1月10日〉)参照。

オンライン試行期(4月)の授業

4月の年度当初は、全員が十分な環境で受講できることを前提とした授業は実施できないため、以下のような対応をとった。

- ・生徒に授業の課題をPDFファイルで配信するオンデマンド形式とした。
- ・解釈が分かれることが予想されたり、価値判断をとまなうような問い(たとえば、「旧石器ねつ造問題はなぜおこったのだろうか」など)への回答を、アンケートアプリGoogle Formsで回収し、学習管理システムのGoogle Classroomを使ってフィードバックをおこなった。
- ・オンライン会議システムGoogle Meetを用い、上記のような問いについて教員と生徒が対話をする“オンラインセッション”の時間を設けた。

この時点ではまだ通信環境が整わなかったり、急な環境変化に戸惑う生徒も多く、“オンラインセッション”は、日本史の内容理解をうながすというよりも、まずはコミュニケーションをはかる場として参加を義務付けず、不参加でも配信した課題に対応できるよう配慮した。

オンライン本格実施期から分散登校期間(5月～夏休み)の授業

オンライン授業の本格的な実施の後(5月～夏休み)は、生徒の負担等を考慮し、週あたりの授業が通常の半分の2時間となった。4月に原始・古代からスタートして年度中に近現代史まで終えることを想定した場合、かなり内容の焦点化が迫られる状況であった。この時期に実際におこなったオンライン会議システムのZoomを用いたリアルタイムでの授業展開は、たとえばつぎの通りである。

②ここでは仏教界の新しい試みとして話題を集めている「テクノ法要」などを紹介した。詳しくは浄土真宗本願寺派照恩寺ウェブサイト(<https://www.show-on-g.com/techno-hoyo>)〈最終閲覧日:2021年1月10日〉参照。

③知識構成型ジグソー法については東京大学CoREFウェブサイト(<https://coref.u-tokyo.ac.jp/>)〈最終閲覧日:2021年1月10日〉参照。

④展開1・展開2でそれぞれ1時間ずつが理想だが、実際は1度目のブレイクアウトセッションまでで1時間の授業となった。

⑤動画配信サービス「ニコニコ動画」のように、プレゼンテーション中の画面に観客からのコメントを流すことのできるサービス。詳しくはComment Screenウェブサイト(<https://comment-screen.com/>)〈最終閲覧日:2021年1月10日〉を参照。

〈導入〉 今日の仏教や神道のあり方について取り上げ、YouTubeやZoomのアンケート機能を活用して生徒のもつ先入観をゆさぶったり興味や関心をもたせる②。

〈展開1 対話と解説〉 プレゼンテーションソフトPowerPointのスライドを使って、生徒と問答をおこないながら、自然への畏怖を軸に神道につながる在来の信仰が生まれていった背景などについて解説し、理解をうながす。

〈展開2 ジグソー法③によるグループ活動〉 本時の展開の基軸となる問い「在来の信仰が存在したにもかかわらず、外来の仏教を取り入れたのはなぜか」を提示。Zoomのブレイクアウトセッション機能で、グループごとに仏教について異なる側面を考察するA～Cの課題を分担し、取り組む。その後、グループを再編し、それぞれ最初のセッションで議論した内容を2度目のブレイクアウトセッションで新たなメンバーに解説する。それにより仏教のもった歴史的役割について多面的にとらえられるようになることを期待した。

〈まとめ〉 A～Cの課題に関する各グループの議論を全体で簡単に確認し、「古代国家において、仏教を受容することはどのような意味があっただろうか」のまとめの問いについてのミニレポートを各自が作成する。

最後にその後の仏教の歴史的変遷、時々の社会の変化への対応について確認し、最初に見た今日における仏教のあり方につなげて2時間分の授業④をまとめた。なお、まとめの問いに関する回答はGoogle Formsにて回収し、後日評価の観点を示したフィードバックを生徒どうしで共有した。これは、本時のテーマについて多面的・多角的に見ることで、自己の学びを振り返ることを期待したものである。

「Withコロナ」の授業

9月に時間短縮ながらも全教科での対面授業が再開したものの、多くの制限をともなういわゆる「新しい生活様式」にもとづく学校生活が現在まで続いている。この状況下での「対話的な学び」の実現については現在も試行錯誤中であるが、引き続きICTを用いることで課題の解決を試みている。その中からつぎの2点を紹介したい。

①Comment Screen⑤で生徒の声を拾う

Zoomを用いた授業での気づきは、普段の教室では発言がみられない生徒がチャット機能で積極的に発言することであった。一方、対面授業再開後の教室では生徒のマスク越しの



図1 Comment Screenを用いた生徒の授業内レポートの共有の様子

発言を教員側がうまく拾いきれないことがある。このような課題を解決するために、Comment Screen (図1)で資料への反応や問いへの回答など生徒の意見を集めることを試みた。

②Google Jamboardによるグループワーク

従来のように付箋や模造紙を用い、顔を突き合わせて議論をおこなう活動ができないため、デジタルホワイトボードとして使用できるGoogle Jamboard (図2)をクラウド上で共同編集することで代替している。

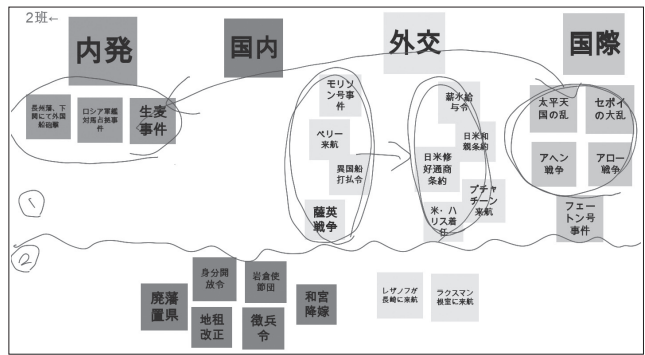


図2 グループワークにおけるGoogle Jamboard活用の一例

オンラインでの授業の成果と課題

最後に、私の授業のコロナ以前・オンライン期間・登校再開後すべての場面を経験した生徒たちによるオンラインによる授業への意見と、筆者の今後の授業の見通しを示してまとめたい。

・生徒が考えるメリット

わからない語句や人名をすぐに検索ができる、スクリーンショットや録画を利用すると復習が容易、チャットやコメント機能で意見を気軽に伝えられる、多様な形態の資料の閲覧が可能など

・生徒が考えるデメリット

通信環境への不安、授業資料の印刷の負担、初対面の生徒どうしでのグループ活動のしづらさ、ほかの生徒と同じ空間にいて得られる視覚・聴覚による情報の欠如など

生徒が考えるオンライン授業についてのメリット・デメリットはおおむね授業者の感覚とも一致している。やはり表情や声など、生徒の反応をこまめに見ながら授業をできない不安は大きい。その一方で、対面授業については、生徒からは感染への警戒や通学の負担を除けばデメリットがほぼあがらなかった。オンラインでの授業の経験をどう生かしていくべきかについては、私自身まだ明確な答えを出せないのが現状である。加えて評価についても、オンラインでの歴史の授業において評価対象となる固有の能力はあるのか、それは歴史的な見方・考え方とどうかわるのか、課題は多い⑥。

冒頭述べた通り、これまでは「以前の授業の再現」を基本としてきたが、今後の感染状況や教育のICT化をにらみ、EdTechなどの先事例をふまえた新たな形の歴史教育への大胆な転換が求められることも予想される。コロナ禍での教員1人ひとりの試行錯誤は貴重な経験知であり、今後、様々な場で共有が進むことを期待したい。

(おおば・だいき／筑波大学附属高等学校教諭)

⑥ コロナ禍以前の授業では優れた取り組みを見せてくれた生徒がオンラインでの歴史授業では思うように実力を発揮できなかったこともあり、評価に迷う場面もあった。